

「生きがい」～人生の最高峰を目指して～

高齢化社会におけるチャレンジと夢



2003年5月、三浦雄一郎は次男の豪太とともに世界最高峰エベレスト山(8848m)登頂、当時の世界最高年齢(70歳)登頂記録と初の日本人親子同時登頂記録を樹立しました。

その後、強度の不整脈を患い、2度にわたる心臓カテーテル手術を経て、再びエベレストの山頂を目指しました。標高8848m、酸素濃度は平地の4分の一。地球上で最も宇宙に近いエベレスト山頂で、75歳の三浦雄一郎の体力年齢は150歳になるともいわれ、山頂を極めるには不整脈の克服のみならず、人類の可能性の扉を開くべく、究極のアンチエイジング(抗加齢)の試みとなりました。そして様々なハードルを越え、遂に2008年5月26日、75歳と7ヶ月にして人類史上初、70歳を超えて2度目のエベレスト登頂、山頂からの第一声は

「涙が出るほど、辛くて、厳しくて、嬉しい」・・・というもの。

三浦の挑戦の原動力は、飽くなき「好奇心」と夢を追い続ける心でした。

冒険家として若い頃はスピードスキー競技、世界7大陸最高峰からの滑降・・・など様々な世界記録をうちたてた三浦雄一郎ですが、60歳を境に、身体と心に脂肪がつき、いつのまにか陥っていた「メタボリック症候群」。人生においてリタイアを意識したそのときに、101歳まで大なる探究心をもってスキーを続けていた父・敬三、そしてオリンピックで活躍していた息子・豪太らの姿を見て再び心にスイッチが入ったのです。

サミュエル・ウルマンの「青春」の詩にあるように、<青春>は心の在りようと同時に、「生きがい」を持つことによって身体も若返ることができる。老いは避けられないものではありませんが、高齢化社会において、いかに人生と向き合い、目標を持つことよって元気に明るく生きる工夫と努力、それぞれの目標<エベレスト>を持つ意義と、家族と人の絆の大切さ、そして新たな挑戦について語ります。

略 歴

プロスキーヤー、クラーク記念国際高等学校校長

1932年青森市に生まれる。北海道大学獣医学部卒業後、1964年イタリア・キロメートルランセに日本人として初めて参加、時速172.084キロの当時の世界新記録樹立。1966年富士山直滑降。1970年エベレスト・サウスコル8000m世界最高地点スキー滑降(ギネス認定)を成し遂げ、その記録映画 [THE MAN WHO SKIED DOWN EVEREST] はアカデミー賞を受賞。1985年世界7大陸最高峰のスキー滑降を完全達成。2003年、5月、次男で元オリンピック選手の豪太とともに世界最高峰エベレスト山(8848m)登頂。当時の世界最高年齢登頂(70歳)と初の日本人親子同時登頂の記録を樹立。2008年5月、75歳にてエベレスト2度目の登頂を果たす。アドベンチャー・スキーヤーとしてだけでなく、全国に1万人いる広域通信制高校、クラーク記念国際高等学校の校長として、また行動する知性派として国際的に活躍中。記録映画、写真集、著書多数。

賞

プロスポーツ大賞殊勲賞、スペイン山岳会名誉会員、アカデミー賞長編記録映画部門(エベレスト滑降)、世界山岳探検会議特別会員、ワシントン州名誉市民、ニューヨーク映画祭ゴールデンイーグル大賞(南極滑降)、国際探検映画祭・冒険探検特別賞、青森市民栄誉賞、北海道功労賞、内閣総理大臣表彰、フランス政府スポーツ青少年功労賞金賞、他